

NHKで山桜の里 戸赤 木地工房放送



木下歌織アナウンサーも体験(TV 画面)



予約電話の紹介(TV 画面)

0241-67-4399



掛け軸紹介(TV 画面)

(TV 画面)



6:36 (1月28日放送 TV 画面)



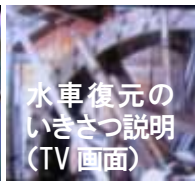
1月24日録画風景



(TV 画面)



木地材料と作品(TV 画面)



水車復元のいきさつ説明(TV 画面)

初体験とは思えない出来栄となった 6 年生の体験授業(1.28)



森林環境学習で木地体験

森林と人との良い関係を取り戻す方法を学ぶ授業の一つとして、檜小六年生十九人は、木地体験をしました。県の森林環境税の見返り事業として毎年実施しているもので、講師の小椋さんがあらかじめ準備しておいた半製品を仕上げ持ち帰りました。

木地工房 はまなかあいづ

NHKで放送 水車ろくろのあった流域(TV 画面)



NHK テレビ県内のローカル放送で木地工房が取り上げられ、木地業が盛んだったころや、村おこしで復活させ現在体験受入れしていることなどが紹介されました。1月24日録画の日は山形と棚倉から常連さんが来てくれており好都合でした。番組はビデオに残されています。



半製品を手にこれから製作にとりかかる

【木地の学習No.52】 職業神としての山神を移住後火を経ずして祀ったであろう事は想像に難くない。そう考えると、相原一族が栗生沢に定着した年代は、元文初年としても大過はないと思える。会津方部への氏子駈は、寛保三(1743)年を初出として明治二十六年に至るまで、十数度の回国をしているが、相原氏は一度も応じていない。文政十年に「栗生沢」として記載している木地師達は、文化年間の頃、信州や飛騨方面から移住してきた人達であった。従って相原氏は栗生沢に移住後、いくばくもなく木地業から撤退してしまっただろうか。彼らが木地師であったことを裏づけるものは、集落の伝承と「親王様」と称する一対の山神像のみである。なお相原氏の本流は、蒲生氏郷に伴われて会津入りした木地頭佐藤和泉と、それに従った木地師の相原氏である。佐藤氏と相原氏は、会津入りから現在に至るまで、離れず移住を供にして現在は猪苗代町高森の地に居住している。栗生沢相原一族は、会津入り後、採算の移動過程においての高森相原一族の一分派であると認識したい。木地運搬と仕送り・生産高 木地師の生活は木地を生産し、売金で食糧や生活必需品を買い求めるものである。山間が生活の場であるため、多少の畑を起こしたり、山菜の利用をしたりしているが、基本的には、主食としての米や塩、味噌等は購入するものであった。〔会津地方歴史民俗資料館「木地語り」より〕(つづく)〕



例年になく大雪となつて
いることしは、集会所の雪下ろしも二回行いました。降雪前カメムシが少なかったため雪が少な
いのではないかと期待もありましたが、当たらなかったよう
です。集会所や神社等も雪から守る作業は欠かせません。

1.25と2.14、集会所の雪下ろし
(写真は1回目の様子)



集会所の
共同作業



いつもより深い雪

2.22 民報



蔵の神幸運願う

下郷町中山地区の蔵の神幸運願う行事が、2月23日(土)に開催された。当日は、雪が降り、厳寒の中、多くの参拝者が集まり、神幸の神輿を担ぎ、境内を巡幸した。神幸の神輿は、境内を巡幸した後、境内の蔵に納められた。神幸の神輿は、境内を巡幸した後、境内の蔵に納められた。

2.23 民報

雪月火

幻想的夜景堪能して

下郷の中山地区 21日イベント

2.21

雪月火

2.18 民報

島民報

2015年(平成27年)2月17日(火曜日)

大内宿雪まつり 下郷

下郷町の大内宿十は、古民家群の中で、四、十五の両日に開催。さまざまな伝統行事や芸が披露された。大内宿まつり 能が披露された。よめて楽しんだ。

日本一の団子さし 小正月行事の団子さしを来場者が楽しんだ。古民家に囲まれながら、伝統行事を体験する貴重な機会となった。

大内宿切り餅 幅広い世代が参加し、大内宿の早さを競った。手伝ってもらいながら木を切ることもあり、観音から賑やかな声があがった。

有志による伝統の三志海祭が披露された。雪の中で、美形の藍色に合わせたひょっこり獅子舞が独特の動きをし、笑いを誘った。

2.17 民報

(ストーリー性のある村づくりのために) [No.21]・下郷町史 晩期 晩期の遺跡は本流の河岸段丘からも出土しているが、後期同様に山間部まで及んでいる。…晩期末葉の遺跡は弥生時代との複合遺跡が多い。縄文時代の環境変化と人々の生活(海進・海退と遺跡) 縄文時代の環境を考える上で貝塚の分布は大変参考となる。山間部にある下郷町ではこのことを確認できないが、関東地方の例では、現在の海水面よりかなり内陸深くまで分布することがわかっている。貝塚が営まれた頃は現在より気温が高く、海進によって海水面が上昇したためと考えられる。南会津の遺跡の分布をみると、採集・狩猟・漁撈を中心とした生活を営んでいた縄文の人々は環境の変化に敏感であったようである。自然の動植物の生育にこの気温の変化が重要で、僅か数度の気温の変化が山や海の県境に激変を及ぼす可能性があるのである。たとえば山のナラやトチ・クルミ・クリ・カヤやヒシなど長期保存のきく堅果類は縄文時代を支える基本的食物であるが、気温の上昇或いは下降によってこれらの樹木が生育できなくなればそれを食料とする人間も動物も生活できなくなり、移動を余儀なくされる。長野県や新潟県、会津地方盆地周辺に営まれた縄文中期の遺跡は堅穴住居をもち、定住生活を営んでいたようで、それを支える食料は主に周辺の山々からもたらされていたのである。「下郷町史-第7巻通史編(発行・下郷町)」より出典(続く)